駒澤大学心理学論集，2008，第10号，57-64
Komazawa Annual Reports of Psychology, 2008, 10, 57-64

原　著

誇りに関する最近の研究動向[1]

有光 興記

Pride : An overview of theory and research

Kohki Arimitsu (*Department of Psychology, Komazawa University*)

KEY WORDS: pride, hubris, self-conscious emotion

選手が大きな競技大会で優勝を決めたときに，ガッツポーズをして喜びを表現している姿を目にすることがある。賞を獲得したときや志望校に合格したときなど社会的成功に伴って経験される感情に誇りがある。誇りは，達成に伴って経験される自己意識的感情（self-conscious emotion）の1つとされる。自己意識的感情の中でも恥や罪悪感についてはその機能や原因，帰結が明らかになりつつあるが(有光，2007)，誇りについてはほとんど研究が行われてこなかった。本研究では，誇りに関する最近の知見をまとめ，今後の研究展開を考えたい。

1．誇りの定義，理論，機能的価値

誇りの定義　辞書的に誇りとは“誇ること。自慢に思うこと。また，その心”である(新村，2008)。誇りに関する国内における心理学的知見はほとんどなく，定義は定まっていないのが現状である。誇りの英訳語の pride には実証的研究が存在するため，本研究では主に pride の研究知見を引用していくことにする。

pride は，肯定的な自己意識的感情であり，自分の行動，発言，特徴が他者より優れている，または望ましいと評価されたときに経験される（Fischer & Tangney, 1995)。そして，他者から認めてもらうため，積極的な行動や発言を行い，自己をより肯定的に評価するようになる。さらに，pride の表出は，pride を経験している人の成功を他者に伝え，社会的地位を向上させる機能がある(Tracy & Robins, 2007 c)。また，所属している集団に pride を表出することで，その集団の成員でいたいことを伝え，社会的地位の向上を受け入れてもらい，それを維持することが可能になる(Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995)。

pride を経験すると，自尊心が向上し，向社会的行動が促進される（Hart & Matsuda, 2007; Weiner, 1985)。しかし，pride を喪失すると，自我脅威から攻撃行動や反社会的行動につながる(Bushman & Baumeister, 1998)。pride は，自尊心に影響を与える主たる感情であり（Brown & Marshall, 2001)，自尊心を媒介として個人の心理過程と対人関係の過程に影響を与える。

誇りに関する理論　Tracy & Robins（2004 a, 2007 d)は，既存の様々な理論をまとめ，Figure 1 に示すような自己意識的感情の過程モデルを提唱した。このモデルは，基本的感情と自己意識的感情だけでなく，自己意識的感情間（恥と罪悪感，誇りと思い上がり）の認知過程の違いを以下のように説明している。ある出来事が生きるか死ぬかという生存目標に関連していると評価されると，怒りや恐れなどの基本的感情が喚起される。出来事が生存目標には関連していないが，自己に関わっており，“こうありたい”というアイデンティティ目標と関連している場合に，その目標との一致，不一致が評価される。アイデンティティ目標と一致している場合は肯定的，不一致の場合は否定的な自己意識的感情が喚起される。さらに，出来事の原因帰属によって経験する自己意識的感情が異なる（Figure 2: Lewis, 2000)。目標と一致した(成功した)出来事の場合に，「自分のしたこと」のような内的，不安定的，特殊的，統制可能な原因に帰属を行うと（例：努力したので，勝ち残った)，pride を経験するが，「自分の能力」のような内的，安定的，全般的，統制不可能な原因に帰属

[1] 本研究は，平成18年度駒澤大学特別研究助成（個人研究）の補助を受けて行われた。

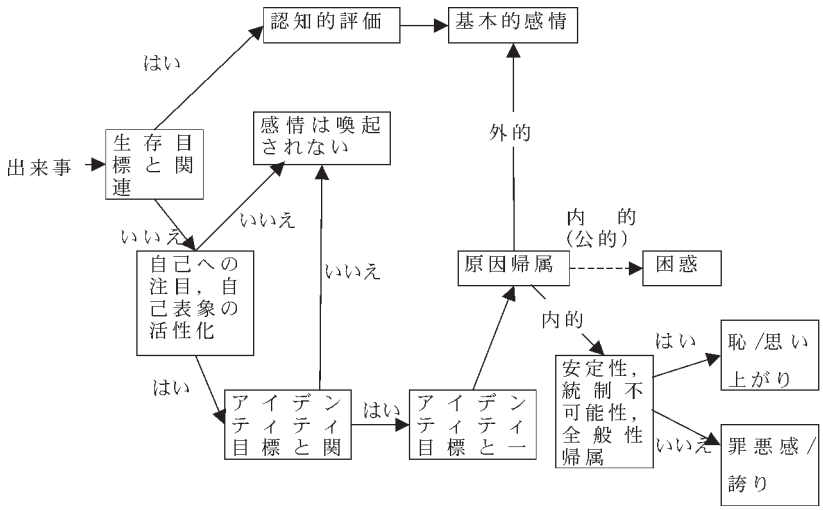

Figure 1　自己意識的感情の過程モデル（Tracy & Robins, 2007d)

成功	失敗	自己への帰属
思い上がり hubris	恥 shame	全体的
誇り pride	罪悪感 guilt/regret	特殊的

Figure 2　自意識関連情動の喚起メカニズム（Lewis, 2000).

すると（例：私はいつも偉大なので，勝利した），hubris（思い上がり，傲慢）を経験する。一方，目標と一致しない，失敗した出来事について，内的，安定的，全般的，統制不可能な帰属（例：自分の能力不足のために失敗した）を行うと shame（恥），内的，不安定的，特殊的，統制可能な帰属（例：自分の行動が過っていたために，人を傷つけた）を行うと guilt（罪悪感），公的な自己に帰属する（例：他者から見た自分の姿がみっともない）と embarrassment（困惑）を経験する。

Lewis (2000) や Tracy & Robins (2004 a) は，pride が 2 つの側面を持つと考えている点が特徴的である。Tracy & Robins (2004 a) によれば，pride は肯定的行動を促進し，自尊心を向上させる。一方，hubris は自己愛を高めるが，自己愛が高い人は自己像が傷つきやすく，攻撃性と敵意，対人関係の問題，ある種の不適応行動の原因となる（Bushman & Baumeister, 1998)。hubris は，自己愛の高い人が自己を否定される恥の経験を抑制する代わりに pride を表出するという自己制御パターンの一部であると考えられる。

機能的価値　自己意識的感情には，自尊心だけでなく対人関係や社会的地位を維持または向上させる機能がある。pride の場合は，他者から良く思われ快感情を経験することで，達成への努力が強化され，さらに社会的地位の向上が見込めるようになるという機能がある。実際に pride を経験するように操作すると，課題成績が向上する（Herrald & Tomaka, 2002)。また，セールスマンが pride を経験すると販売への動機が高まり，効果的な販売方略を行うようになり，自己効力感が高まる（Verbeke, Belschak, & Bagozzi, 2004)。pride は向社会的行動を動機づけるが（Hart & Matsuba, 2007)，これはさらに他者からの尊敬と敬意を集めることで，自分たちが誇りに思い，社会的地位と自尊心を維持，向上させることを目的としているからである。

2．誇りに関する実証的研究

この節では，誇りに関する様々な実証的な研究を紹介する。PsycInfo を使用し pride をキーコンセプトとする心理学的研究を調べたところ，2008 年 1 月の時点で 312 件存在した。その文献数の経年的推移を Figure 3 に示した。Figure 3 から，登録されている最も古い論文は 1872 年のものであ

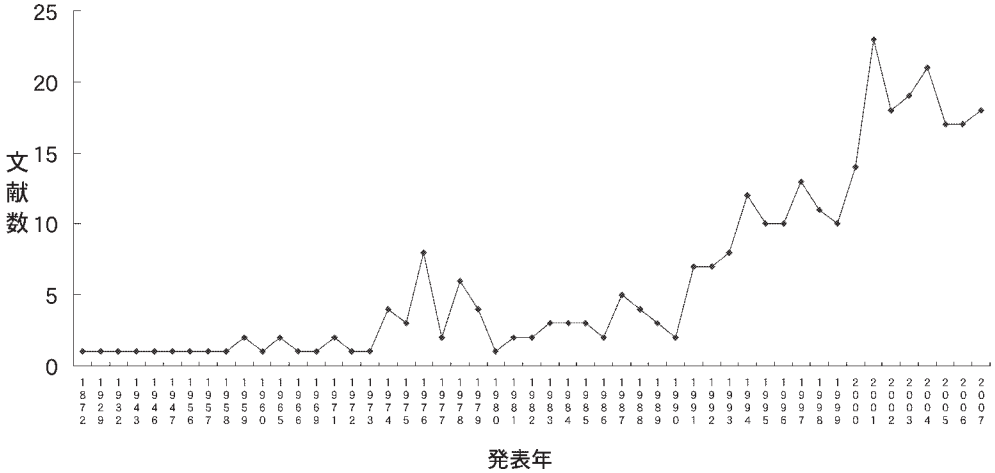

Figure 3　PsycInfo に見る pride を key concept とする文献数の推移

るが，1970 年代まではほとんど心理学的研究は行われなかったことが分かる。また，1990 年代から研究が徐々に行われ始め，2000 年代に文献数が上昇したことが読み取れる。研究内容としては，1950 年代後半の集団の pride の研究（Berkowitz & Levy, 1956）や発達研究（Levin & Baldwin, 1959）を契機に，近年では非言語的表出に注目した研究（Tracy & Robins, 2004 b, 2007 a; Tracy, Robins, & Lagattuta, 2005）や，自尊心，自己愛などのパーソナリティ（Tracy & Robins, 2007 b），道徳的行動（Hart & Matsuba, 2007）との関連に注目した研究などが行われている。また，キーコンセプトとして挙げられることは少ないが，基本的感情とその比較文化的研究（Kitayama, Mesquita, & Karasawa, 2006）において，pride も扱われている。以下，非言語的表出，発達，状態と特性，原因帰属，道徳的行動，比較文化という領域に分け，pride に関する研究を概観したい。

非言語的表出に関する研究　pride は，基本的感情に分類されていないが，他の感情と区別可能な非言語的表出があることが分かっている。Tracy & Robins (2004 b, 2007 a) と Tracy et al. (2005) は，子どもが成功したときにするポーズを俳優にとらせ，表出の成分（頭の傾きの程度や腕の位置）を操作し，どの成分が pride と認識されるために重要であるかを検討した。イタリアとアメリカの成人，4 歳の子どもを対象にポーズをとった写真を見せ，どの感情に見えるかを回答させたところ，pride と最も高く認識された表出は，3 つの身体表出（胸をふくらませる，頭を少し傾ける，両手を腰に当てる）と微笑（small smile）を持つものであった。さらに，Tracy & Robins (2007 a) は，視線と腕の位置も操作し，視線はまっすぐ，腕は組んだり挙げたりせず，腰に当てた方が pride と認識されやすいことを明らかにした。また，hubris と pride における表出の違いについても検討されたが，pride のほうが視線を上にする以外に，2 つの感情で典型的な表出に違いはなかった。一連の研究において明らかにされた pride の表出は，基本的感情と同様に 80-90％の認識率があり，信頼できる結果と言える。また，pride の表出は，基本的感情と異なり，表情に限定されていない点が特徴であり，表情だけだと幸福と認識される。Tracy & Robins (2007 a) によれば，pride の表出が好ましくないと評価される文化もある (Eid & Diener, 2001; Mosquera, Manstead, & Fischer, 2000; Paulhus, 1998; Zammuner, 1996) ため，表情よりも制御しやすい身体のポーズを pride は持ち，環境（文化）に表出を適応させていると考えられる。

行動観察においても，pride の表出は検討されている。成績が良かったときは，悪いときと比べて，背筋を真っすぐ伸ばした姿勢（erect posture）を取りやすく（Weisfeld & Beresford, 1982），その姿勢をとるとより高い pride を経験しやすい（Stepper & Strack, 1993）ことが分かっている。以上の行動観察の結果は，表出の写真を認識する研究（Tracy & Robins, 2007 a など）と整合している。

感情の表出は社会的機能を持つが，pride の場合はどうだろうか。身体を広げるという pride の表出は，自分を大きく見せ，他者の注意を引きつけ，自分の優秀さを示すというコミュニケーション機能がある（Tracy & Robins, 2007 b）。実際に，pride の表出から高い社会的地位が推測される（Tiedens, Ellsworth, & Mesquita, 2000）。また，微笑は，相手との交友関係や従順さを示す機能があり，成功の後の笑いは，“私は優れているが，これからもあなたの友だちでいたいと思っています。攻撃しないでください”というメッセージとなる。

発達に関する研究　自己意識的感情の経験には，自己知覚，自己表象，外的基準と自分の行動の比較，内的原因帰属の能力が必要であり（Lewis, 2000; Tracy & Robins, 2004 a, 2007 d），それらの発達が必要となる。様々な研究から，pride は 3 歳の終わり頃に出現すると考えられる（Belsky & Domitrovich, 1997; Lewis, Alessandri, & Sullivan, 1992; Stipek, 1995）。Stipek（1995）は，2 歳半から 3 歳の子どもにパズルを解かせ，その成功時の表出を観察した。その結果，パズルに成功した子どもは，実験者がパズルを完成させるのを見ているときよりも，笑い，見上げる（looking-up）傾向にあり，これが pride の初期の表出としている。また，失敗場面よりも成功場面で，しかも難しい場面で成功したときほど，3 歳の子どもは胸を張り，肩を後ろにする姿勢となることも分かっている（Belsky & Domintrovich, 1997; Lewis et al., 1992）。

3 歳で pride の表出が可能になるが，3 歳の子どもは他者の pride の経験を正確には推測できない。Tracy et al.（2005）によれば，pride と幸福や驚きの非言語的表出の区別は，3 歳では不可能であるが，4 歳になるとチャンスレベルよりも有意に可能になる。また，7 歳児は，pride と幸福の喚起状況を区別することができないが，9 歳か 10 歳になると適切な原因帰属を行うようになり，個人の成功が原因の場合にのみ pride を経験すると認識するようになる（Kornilaki & Chlouverakis, 2004; Thompson, 1989）。以上の結果より，10 歳以降になると他の感情と区別して pride を表出し，他者の pride も正確に認識できるようになると考えられる。

状態，特性と原因帰属に関する研究　Tracy & Robins（2004 a）や Lewis（2000）で述べられているように，pride には自尊心と関連する真正な pride(authentic pride）と自己愛と関連する思い上がり（hubristic pride）が存在する。2 種類の pride を測定しようとする試みは，まず Tangney（1990）の自己意識的感情と原因帰属尺度（The Self-Conscious Affect and Attribution Inventory: SCAAI）おいて行われた。SCAAI は，複数のシナリオ（例：よい成績をもらえた）に対してどのような反応をするのか（例：有能だと思い誇らしく思う）を評価する尺度であり，pride については α（全体的自己に帰属する pride）と β（自分の行動に帰属する pride）の 2 種類が測定可能である。αpride は恥と負の相関，βpride は外在化と正の相関を示す傾向にあった。しかし，項目は 3 項目のみで信頼性係数自体が .12―.55 と低く，その後は恥と罪悪感について検討されるのみで，SCAAI を使用した pride 研究は進展しなかった。

Tracy & Robins（2007 b）は，参加者に pride の表出を見てラベルをつけてもらい，ラベルの類似性を分析したところ，真正（例：優れた，自信のある，名誉のある）と思い上がり（例：思い上がった，傲慢な，独善的な）という 2 つのクラスターが形成された。また，参加者に pride 経験を思い出させ，そのときの感情評定を行ったところ，ここでも 2 つの因子（真正と思い上がり）が得られることを示した。この 2 因子は，pride 特性評価（proneness to pride）においても同様の結果であった。さらに，真正な pride は，自尊心，外向性，調和性，誠実性，情緒安定性と正の相関，恥と負の相関を示し，思い上がりは，自尊心，調和性，誠実性と負の相関，恥と正の相関を示すことを明らかにした。この相関のプロフィールは，pride の状態と特性で同一であった。

また，Tracy & Robins（2007 b）では，原因帰属についても検討している。参加者の pride 経験の自由記述を分析したところ，真正な pride は内的，不安定原因による肯定的出来事，思い上がりは，個人の安定的能力による肯定的出来事が記述されており，Tracy & Robins（2004 a）のモデルと一致する結果が得られた。また，pride を喚起する 2 つの架空のシナリオ上で，原因帰属を操作し，pride を測定したところ，内的，不安定的，統制可能な原因（例：努力）による成功経験のシナリオで真正な pride が経験され，内的，安定的，統制不

可能な原因（例：能力）による成功経験のシナリオで思い上がりが経験されやすいことが分かった。また，努力に帰属する傾向の人は，真正なprideを経験しやすく，能力に帰属する傾向の人は，思い上がりを経験しやすいことも明確にされた。以上の結果は，Lewis（2000）やTracy & Robins（2004 a）からの予測と整合する結果であった。

道徳的行動に関する研究　道徳的行動とprideの関係は，ほとんど検討されていない。道徳的行動は，伝統的に共感性が重要な要因であるとされてきた（Eisenberg, 2000）。しかし，道徳的行動の1つであるボランティア行動は，共感性と関係があるという研究（Penner, 2002）と関係がないという研究（Monroe, 1991）があり，Hart & Matsuba（2007）はprideがボランティア行動を動機づける変数として重要であると考え，調査研究を行った。その結果，prideはデモグラフィック変数（性別，年齢，所得など），パーソナリティ変数（世代性とBig Five）と独立してボランティア行動を促進することが明らかになった。また，竹西・竹西（2006）は，集団の手続き的公正（組織の決定が公正かどうか）と当該集団の社会的アイデンティティ（プライドとリスペクト），向集団行動，自尊感情の関係について検討した。ここでのプライドは，成員が所属集団に対して持つ全般的価値の評価であり，リスペクトとは成員が集団内で取る位置の自己評価である（Smith & Tyler, 1997）。分析の結果，手続き的公正がプライドを高め，プライドが権威是認，政策支持，内集団他成員への支援，外集団他成員への支援，集合自尊心を促進することが明確にされた。以上の研究から，所属集団に対してprideを持つことはボランティアや援助行動などの道徳的行動を促進する傾向があると言える。

比較文化研究　prideの表出については，文化間で共通して認識可能という知見がある（Tracy & Robins, in press）。読み書きの言語を持たず，メディアとの接触がないアフリカ西部のブルキナファソの村民に，アメリカとアフリカの男女の感情のポーズ写真を見せ，最も当てはまる感情語を回答させたところ，prideに関しては57%というチャンスレベルよりも有意な認識率があった。57%という認識率は，アメリカ人を対象としたTracy & Robins（2007 a）よりも低かったが，ブルキナファソの村民に関しては他の6つの感情の認識率も平均50%程度であり，prideも十分な認識率であったと考えられる。この知見は，prideの表出が文化間で共通しているという1つの証拠であり，文化間共通の表出がないという点で基本的感情と自己意識的感情が異なるという考え（Ekman, 1992）と異なる結果と言える。

prideの表出に関しては，文化差が認められない可能性があるが，集団主義文化は集団の維持を重んじるため個人の地位の向上を目的としたprideは不適応的と認識される可能性がある。実際に，アメリカとオーストラリア（個人主義）と中国と台湾（集団主義）の比較（Eid & Diener, 2001），オランダ（個人主義）とスペイン（集団主義）の比較（Mosquera et al., 2000）では，個人主義の方がprideを肯定的に評価した。Scollon, Diener, Oishi, & Biswas-Diener（2004）は，5文化（アジア系アメリカ人，ヨーロッパ系アメリカ人，スペイン系アメリカ人，インド人，日本人）中では，スペイン系アメリカ人（集団主義）のprideの評定（日誌法で測定）が3つのアジア系文化（集団主義）よりも高いことを明確にした。さらに，インド人はprideを否定的感情と見なしていたが，日本は肯定的感情と見なしていた。この知見は，集団主義文化内でもprideの経験頻度や評価が異なることを示している。また，中国人はアメリカ人より集団のprideを個人のprideより肯定的に捉える傾向があることも分かっている（Stipek, 1998）。中国人に関しては，prideを統制不可能な出来事から経験することから（Mauro, Sato, & Tucker, 1992），個人のprideは思い上がりとして捉えている可能性が考えられる。Kitayama et al.（2006）は，自己を対人関係の中にさらに関与させる関与的感情（socially engaging emotion: respect, sympathy, guilt, shameなど）と自己を対人関係から脱関与させる脱関与的感情（socially disengaging emotion: proud, superior, sulky feelings, angryなど）の強さが，肯定的，否定的出来事においてアメリカ人（個人主義）と日本人（集団主義）という2文化間で異なると考え，調査を行った。その結果，日本人は否定的出来事で否定的な関与的感情を強く感じやすく，アメリカ人は肯定的出来事で肯定的な脱関与的感情を強く感じやすいことが明らかになった。この知見は，文化によって異なる自己観（集

団主義と個人主義）に従い，状況の性質に合わせて経験する感情の強度が異なることを示している。また，pride については，日本人よりアメリカ人の方が強く経験することが示唆される結果である。

3．今後の展望

誇りについては，本邦において実証的研究はほとんどなく，本研究ではその英訳語である pride に関する研究を中心にその理論と最近の研究知見を概観した。ここでは，それらの研究知見を踏まえ，今後の研究展開について論じたい。

欧米では，基礎的な知見が集まりつつあるとは言え，表出や発達などにおいて課題は残っている。例えば，実験場面では，pride の喚起に伴う生理的反応や随伴して活性化する大脳皮質の測定が課題となる。また，理論から予測される pride の従属変数との関係を縦断的に検討した研究はほとんど存在しない。すなわち，どのようにして pride の経験が，自尊心や自己愛を変容させ，向社会的行動や達成に関連しているのかについては相関研究のみで，縦断的な検討はなされていない。pride の社会的機能についても，表出が他者にどのように理解され，実際に社会的地位の向上につながるのかという予測が実証されていない。今後，以上の課題を検討する研究が望まれる。

さらに，本邦における心理学的研究がほとんど存在しないため，我が国において pride で得られた知見が再現できるのか確認すべきである。現在のところ，誇りの定義すら定まっておらず，まず誇りと pride の違いを表情や経験などを指標として明確にしていく必要がある。

我が国において誇りの特徴を明確することは，感情心理学の理論だけでなく比較文化心理学の理論との整合性の確認にもなり，比較文化的視点から重要な知見を生み出す可能性がある。集団主義の中国と個人主義のアメリカでは，pride の特徴が異なっており，同様の違いが日本でも認められる可能性がある。Markus, Uchida, Omoregie, Townsend, & Kitayama（2006）はオリンピックにおいて金メダルを獲得した選手の報道の仕方を日米で比較した。その結果，アメリカでは選手の個人的特徴や競技そのものを報道する傾向にあるのに対して，日本では選手のバックグラウンドや苦労した経験，家族などの他者，感情状態，そして選手のメダル獲得に対する世間の反応について報道する傾向にあった。日本人が，個人の成功よりも選手を支えた他者や成功を喜ぶ他者を報道する傾向が強いことは，個人よりも集団の誇りを経験する傾向が強い可能性を示唆している。集団の pride をより肯定的に捉えることは，中国人に関しても認められており（Stipek, 1998），集団主義文化に共通して見られる特徴かもしれない。集団の誇りは，我が国でも会社組織において集団の維持に有効な変数として取り上げられている（平田，2002）。我が国で誇りの研究を行う場合には，個人だけでなく集団の誇りについても検討していく必要があるだろう。

引用文献

有光興記（2007）．罪悪感と羞恥心　鈴木直人（編）感情心理学　朝倉書店　pp.172-193．

Belsky, J., & Domitrovich, C. (1997). Temperament and parenting antecedents of individual difference in three-year-old boys' pride and shame reactions. *Child Development,* **68**, 456–466.

Berkowitz, L., & Levy, B. (1956). Pride in group performance and group-task motivation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **53**, 300-306.

Brown, J. D., & Marshall, M. A. (2001). Self-esteem and emotion: Some thoughts about feelings. *Personality and Social Psychology Bulletin,*, **27**, 575–584.

Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology,* **75**, 219–229.

Eid, M., & Diener, E. (2001). Norms for experiencing emotions in different cultures: Inter- and intranational differences. *Journal of Personality and Social Psychology,* **81**, 869-885.

Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. *Cognition and Emotion,* **6**, 169-200.

Eisenberg, N. (2000). Emotion, regulation, and moral development. *Annual Review of Psychology*, **51**, 665-697.

Fischer, K. W., & Tangney, J. P. (1995). Self-conscious emotions and. the affect revolution: Framework and overview. In J. P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment,*

and pride. New York: Guilford Press. pp.3-22.
Herrald, M. M., & Tomaka, J. (2002). Patterns of emotion-specific appraisal, coping, and cardiovascular reactivity during an ongoing emotional episode. *Journal of Personality and Social Psychology,* **83**, 434-450.
Hart, D., & Matsuba, M. K. (2007). The development of pride and moral life. In J. L. Tracy, R. W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research*. New York: Guilford. pp.114-133.
平田謙次（2002）. 誇り感情を媒介としたワークモチベーション因果モデル ソーシャル・モチベーション研究, **1**, 31-41.
Kitayama, S., Mesquita, B., & Karasawa, M. (2006). Cultural affordances and emotional experience: Socially engaging and disengaging emotions in Japan and the United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 890-903.
Kornilaki, E. N., & Chlouverakis, G. (2004). The situational antecedents of pride and happiness: Developmental and domain differences. *British Journal of Developmental Psychology,* **22**, 605-619.
Leary,M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology,* **68**, 518-530.
Levin, H., & Baldwin, A. L. (1959). Pride and shame in children. In J. R., Marshall (Ed). (1959). Nebraska symposium on motivation, 1959. Oxford, England: Univer. Nebraska Press. pp. 138-173.
Lewis, M. (2000). Self-conscious emotions: Embarrassment, pride, shame, and guilt. In M. Lewis & J. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions* 2nd ed. New York: Guilford Press. pp.623-636.
Lewis, M., Alessandri, S. M., & Sullivan, M. W. (1992). Differences in shame and pride as a function of children's gender and task difficulty. *Child Development,* **63**, 630-638.
Markus, H. R., Uchida, Y., Omoregie, H., Townsend, S. S. M., & Kitayama, S. (2006). Going for the gold: Models of agency in Japanese and American contexts. *Psychological Science*, **17**, 103-112.
Mauro, R., Sato, K., & Tucker, J.(1992). The role of appraisal in human emotions: A cross-cultural study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 301-317.
Monroe, K. R. (1991). John Donne's people: Explaining differences between rational actors and altruists through cognitive frameworks. *Journal of Politics*, **53**, 394-435.
Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (2001). Unraveling the paradoxes of narcissism: A dynamic self-regulatory processing model. *Psychological Inquiry,* **12**, 177-196.
Mosquera, P. M., Manstead, A. S. R., & Fischer, A. H. (2000). The role of honor-related values in the elicitation, experience, and communication of pride, shame, and anger: Spain and the Netherlands compared. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **26**, 833-844.
Paulhus, D. L. (1998). Interpersonal and intrapsychic adaptiveness of trait self-enhancement: Amixed blessing? *Journal of Personality and Social Psychology,* **74**, 1197-1208.
Penner, L. A. (2002). Dispositional and organizational influences on sustained volunteerism: An interactionist perspective. *Journal of Social Issues*, **58**, 447-467.
Scollon, C. N., Diener, E., Oishi, S., & Biswas-Diener, R. (2004). Emotions across cultures and methods. *Journal of Cross-Cultural Psychology,* **35**, 304-326.
新村　出（編）（2008）. 広辞苑　第６版　岩村書店
Smith, H. J., & Tyler, T. R. (1997). Choosing the right pond: The impact of group membership on self-esteem and group oriented behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 146-170.
Stepper, S., & Strack, F. (1993). Proprioceptive determinants of emotional and nonemotional feelings. *Journal of Personality and Social Psychology,* **64**, 211-220.
Stipek, D. (1995). The development of pride and shame in toddlers. In J. P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride.* New York: Guilford Press. pp.237-252.
Stipek, D. (1998). Differences between Americans and Chinese in the circumstances evoking pride, shame, and guilt. *Journal of Cross-Cultural Psychology,* **29**, 616-629.
竹西正典・竹西亜古（2006）. 手続き的公正の集団価値性と自己価値性：向集団行動および自尊感情における社会的アイデンティティ媒介モデルの検

討　社会心理学研究，**22,** 198-220.

Tangney, J. P. (1990). Assessing individual differences in proneness to shame and guilt: Development of the Self-Conscious Affect and Attribution Inventory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 102-111.

Thompson, R. A. (1989). Causal attributions and children's emotional understanding. In C. Saarni & P. Harris (Eds.), *Children's understanding of emotion*. Cambridge, UK: Cambridge University Press. pp.117-150.

Tiedens, L., Ellsworth, P. C., & Mesquita, B. (2000). Sentimental stereotypes: Emotional expectations for high- and low-status group members. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **26**, 560-575.

Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2004a). Putting the self into self-conscious emotions: A theoretical model. *Psychological Inquiry,* **15**, 103-125.

Tracy, J. L., & Robins, R.W. (2004b). Show your pride: Evidence for a discrete emotion expression. *Psychological Science,* **15**, 194-197.

Tracy, J. L., & Robins, R.W. (2007a). The prototypical pride expression: Development of a nonverbal behavior coding scheme. *Emotion,* **7**, 789-801.

Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2007b). The psychological structure of pride: A tale of two facets. *Journal of Personality and Social Psychology,* **92**, 506-525.

Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2007c). The nature of pride. In J. L. Tracy, R. W. Robins, & J. P. Tangney (Eds.), *The self-conscious emotions: Theory and research.* New York: Guilford. pp. 263-282.

Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2007d). Self-conscious emotions: Where self and emotion meet. In C. Sedikides & S. Spence (Eds.), *The self in social psychology. Frontiers of social psychology series*. New York: Psychology Press. pp.187-209.

Tracy, J. L., &Robins, R. W. (in press). The nonverbal expression of pride: Evidence for cross-cultural recognition. *Journal of Personality and Social Psychology*

Tracy, J. L., Robins, R.W., & Lagattuta, K. H. (2005). Can children recognize the pride expression? *Emotion,* **5**, 251-257.

Verbeke, W., Beschak, F., & Bagozzi, R. (2004). The adaptive consequences of pride in personal selling. *Journal of the Academy of Marketing Science*, **32**, 386-402.

Weiner, B. (1985). An attributional theory of achievement motivation and emotion. *Psychological Review,* **92**, 548-573.

Weisfeld, G. E., & Beresford, J. M. (1982). Erectness of posture as an indicator of dominance or success in humans. *Motivation and Emotion,* **6**, 113-131.

Zammuner, V. L. (1996). Felt emotions and verbally communicated emotions: The case of pride. *European Journal of Social Psychology,* **26**, 233-245.